

ピアノによる音楽体験が保育者養成校の学生に及ぼす影響について

ピアノ初心者グループレッスンの試み

落合 知美・鈴木 由美子

Influence on Nursery Training School Students by Music Experience with Piano:

Try of a beginner Group lesson

OCHIAI Tomomi, SUZUKI Yumiko

キーワード：音楽教育、幼児の表現、ピアノ実技、初学者、グループレッスン

1. はじめに

保育者養成校におけるピアノ実技指導は、現場において幼児の表現を導くために重要な意味を持ち、同時にその修得には一筋縄ではいかない問題をも孕んでいる。数々の保育者養成校では、多くの教員たちがそのための多くの工夫を施し、先行研究も枚挙に遑がない。

如何にして養成校で行われるピアノ実技指導を魅力あるものにし、学生のモチベーションを維持しながら保育現場で通用する力を付けるか。そしてピアノが弾ける保育者として現場に送り出すか。養成校にとっては、大変に重要なことと捉えている。

昨今は、入学時ピアノ初学者が半数を占める。埼玉東萌短期大学において平成28年度及び29年度入学のピアノ初学者に対して、入学準備のための「プレカレッジ」3回と授業「音楽Ⅰ」において3回の「初学者向けグループレッスン」を行った。その「初学者クラス」と名付けられたグループレッスンが、受講した学生にどのような影響を及ぼしたか。

平成28及び29年度入学の1年生全員に対して行った「ピアノ初学者アンケート」調査を基に検討し考察した。

2. 養成校におけるピアノ実技 グループレッスンに関する先行研究とその定義

従来の研究は、各養成機関においてピアノ実技指導はどのような形態で行われているか、具体的にはどうであるか、なぜその形態をとっているのかに視点を置き、養成校ごとの違いを知ることによって齎される本学のピアノ指導についての、新たな展開を求めた。具体的なレッスン形態の提示は、音楽レッスン、特に実技に関するものは、基本的に「個人レッスン」が主軸とされていることが多かった。

その中で、野上俊之は、次のように述べている。

レッスンは、基本的に3人の学生を45分で行っているが、作曲、楽曲、演奏について等の情報を共有するためのグループレッスンではない。偶然同席したメンバーであるため、基礎的な技術の習得を必要とする学生、多くの音楽や良い演奏を聴いた方が良い学生、悪い癖を直したい学生など様々である。したがって、自分がピアノに向かっている時のみ熱心で他人が演奏している時は心ここにあらずという有り様である。(野上, 2014, p.75)¹⁾

また、梁島章子は「初等教員養成のピアノ指導についての研究」の中で、

授業形態は、学習経験の似ている3～5名による「グループレッスン」の方法を採用し、初級、中級、上級の各グループごとに、多面的な音楽的能力を養うことを学習目標とした教材を編成し、指導を行っている。時間的制約や入学時の経験差などから、指導上様々な問題が生じるが、グループレッソンの利点を生かしながらバラエティに富んだ教材を学習させる指導は、ピアノ技術の習得の身に偏らない、音楽に対する幅広い理解と体験を可能にするものと思われる。(梁島, 山崎, 鹿谷, 坂井 1989, p.59)²⁾

と述べている。具体的には、

幼教課程のピアノの授業は、45分前後3～5名による「グループレッスン」の方法を取っている。(中略) グループ分けをする第1の理由としては、小グループに分けると、全体の中で見るより、個々の特徴がより明確に把握できる、ということがあげられる。第2の理由としては、時間的制約があるために個人指導に十分な時間がかけられないが、グループレッソンの利点を活用することで、個人レッスンにない成果が期待できる、という事があげられる。以上2つの理由で、グループレッソンの方法が最適であると考えている。(梁島他, 1989, p.65)²⁾

ピアノの授業は、グループ形態による個人指導で行われていた。仲間の授業を聴きながら学ぶという演習の要素も取り入れた形態で個人指導を行っている。(梁島他, 1989, p.62)²⁾

と述べていた。

偶然同席したメンバーでレッスンをする形態と、習熟度別にグループ分けを行い、同程度の学生同士が同じメンバーでレッスンを続けていくという様に「グループレッスン」と言いながらも様々な形があった。また、「仲間の授業を聴きながら学ぶ」という記載もあり、共に音を出さずともそこに在る音楽的空間の共有が行われていた。

梁島は、グループレッソンの利点を、

学生が単に受け身で受ける一方通行の授業でなく、グループの仲間が、指導された内容を聞き取り参考にしたり、仲間同士励まし合ったり競争したりして、学生同士が自主的に学び合う場となる。(梁島他, 1989, p.68)²⁾

と記し、単なる授業形態だけでなく、学生同士の学び合う相互作用にも言及した。

ここで「グループレッスン」とはどのような形態を指すのかという疑問が生じた。学生が同室に入りヘッドホンを使って各自の電子ピアノに向かって練習をし、交代制で教員のいる同室のピアノの前に行ってレッスンを受ける事を「グループレッスン」とするのか、或いは教員は全体に向けての指導をし、学生は全員で一斉に歌い、弾くことをそう呼ぶのか。どちらにしても教員がその成果を聴き指導を受ける学生が個人であるならば、それは「グループでの練習形態を持った個人指導」ではないだろうか。

グループレッソンの草分けと言え、ヤマハ音楽教室の幼児科(2年間)であろう。このヤマハ幼児科において行われているグループレッソンは、最大10人程度の人数で行われる。基本的に子どもの横に座っているだけではあるが保護者もレッスンに参加することが必要となる。1年目、2年目共に個人指導は無く、1年目では全員で同じ音色で音を出し、同じ曲を学ぶ。2年目になると、全員で音を出して演奏することは変わらないが、各自の楽器の音色を変え、それぞれのパートを受け持ち、アンサンブルを行うようになる。

ヤマハの幼児科レッスンは「グループでの練習形態を持った個人指導」を含まず、「全員で一斉に行うグループレッスン」であると考えられた。

グループレッスンが音楽教育現場に取り入れられた経緯は、個人レッスンに代わるものとして取り入れられたのではなく、単に一人の教員で多くの学生を教えられるという人的な利点、そして経営側の経済的な利点、時間の効率的な活用である

と推測される。

本学における初心者に対するグループレッスンの定義を、そのグループに属する学生が一斉に歌い、音を出し、演奏方法を学ぶ共行動効果を伴うものとした。

3. 「ピアノ初学者アンケート」調査概要

(1) 平成28年度、29年度入学者全員に対して行われたアンケート調査

a. 目的 入学者のピアノ実技に関する経験の有無を調べ、今後の授業に活かすための調査研究の資料とする。対象者には、その旨を伝え了解を

得た。

b. 方法 両年共に第1回プレカレッジから音楽I第1回目授業の間に実施

c. 回答方法 当てはまることに○を付ける(無回答あり)

d. 実施日 平成28年2月12日

平成29年2月7日

e. 実施者 落合知美 教授

f. 製作者 落合知美 教授

(2) 調査結果

1. ピアノ経験について 表1、表2参照

表1 平成28年度ピアノ初学者アンケート 入学者数79名

尺度	項目	非常に (6～10年)	かなり (4～5年)	多少 (半年～3年)	全くない (0年)
ピアノ経験	1. 習ったことがあるか	12名	7名	26名	34名
	2. 弾いたことがあるか	7名	5名	46名	21名
初学者の負担度	初めてピアノ習うことに関し不安はあるか	16名	14名	6名	1名
初学者の適正度	1. 何かを長く続けたことはあるか	17名	6名	10名	4名
	2. どの位か ()参照	17名	2名	12名	3名
初学者の不安度	1. ピアノ技術習得に恐怖心はあるか	7名	12名	14名	4名
	2. 期待感はあるか	6名	16名	15名	0名

表2 平成29年度ピアノ初学者アンケート 入学者77名

尺度	項目	非常に (6～10年)	かなり (4～5年)	多少 (半年～3年)	全くない (0年)
ピアノ経験	1. 習ったことがあるか	13名	12名	26名	26名
	2. 弾いたことがあるか	8名	10名	35名	22名
初学者の負担度	初めてピアノ習うことに関し不安はあるか	15名	12名	6名	0名
初学者の適正度	1. 何かを長く続けたことはあるか	8名	12名	11名	4名
	2. どの位か ()参照	12名	6名	9名	3名
初学者の不安度	1. ピアノ技術習得に恐怖心はあるか	6名	13名	13名	2名
	2. 期待感はあるか	4名	15名	15名	0名

表3

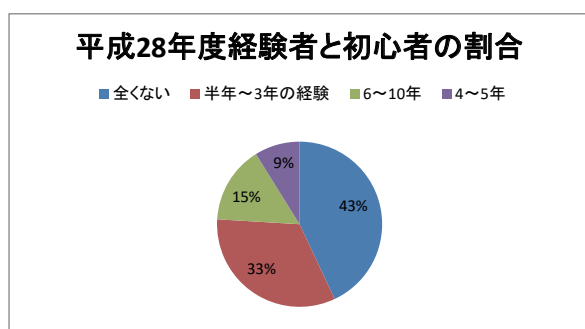
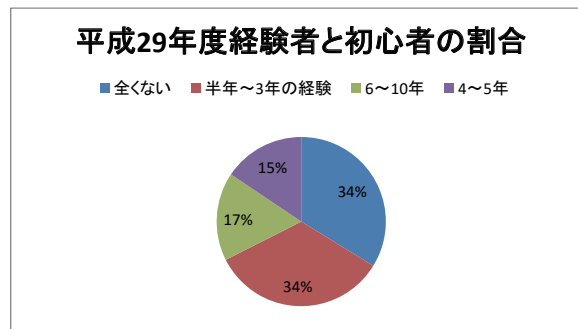


表4



アンケート結果（表1、表2）から、28年度入学者における初心者（ピアノ未経験者）の割合は、全体の43%、期間に関わらずピアノの経験の有る者は57%であった。29年度入学者において初心者は33%、経験者は67%と判明した。ただ、この調査では、自己申告（本人の自己評価）を基にしているため、経験者と答えた者もその経験とレッスンの進捗は把握されていない。

この結果からみると、初心者は半数以下である。しかし、この数字は少ない数ではない。全体の43%、或いは33%の学生を2年間で園児や大人たちの前で歌いながらピアノが弾ける状態にまで持っていくということは至難の技であると考えられた。

また、ピアノ技術習得に不安を感じている学生が、28年度が全体の47%、29年度が44%いる事も分かった。これは初学者のみならず、経験者もその不安を感じていると考えられた。

ただ、入学時までにピアノのレッスンを経験している学生については、その授業の中でどのようなレッスンが行われていくか説明が行われれば、未知のことに対するその不安は薄らいでいくものと考えられたため、授業の初めに説明を行う事で対応した。

ピアノの経験のない初心者よりも半年から4～5年ある学生の方が、ピアノ技術習得に関して恐怖心を持っていることが分かった。それは、技術習得の困難さを理解しているためと考えられた。

4. 埼玉東萌短期大学のピアノ実技修得のための授業とグループレッスンの導入について

本学のピアノ実技基礎のための授業は、1年生前期「音楽Ⅰ」、後期「音楽Ⅱ」があり、教本は「大学ピアノ教本」を使用している。その中から練習課題曲として、ピアノの基礎技能習得を中心に、初心者には特に必要と判断された曲を選曲し、前期14曲、後期7曲を学んでいく。担当教員は、専任1名、非常勤5名である。専任が全体授業を持ち、非常勤が個人レッスンを担当する事を基本としている。この授業は、練習状況によ

って個人差の大きく出る科目であるため、先に進む力のついた学生は担当教員の判断によって進め、課題曲が終了した学生は、「弾き歌い」のレッスンを受ける。教本は、「幼稚園教諭・保育士養成課程 幼児のための音楽教育」「明日へ歌い継ぐ日本の子どもの歌：唱歌童謡140年の歩み」を使用している。どちらを使用するか、指針は専任教員によって示されるが、判断は担当教員に任されている。

「音楽Ⅰ」は、楽譜が読める学生、個人的にピアノを習ったことのある学生、出身校に保育科があり養成校での授業を疑似体験してきた学生等と、全く初めて楽譜を見る学生、ピアノを今まで触ったことのない学生が混在しているところから始まる。

一般的にはピアノのレッスンは個人レッスンで行われることが多い。概ね一人30分で行われる。しかし、養成校に入学する初心者全員に対し、その個人レッスンの時間を作ることは、時間配分、人的配置を考えると大変困難なことと思える。

また、初心者がピアノを弾くことを学ぶ前に、読譜のための知識を習得するにも、現在行われている個人レッスンの時間内（90分授業内実技担当教員5名、各7～8人担当、一人平均9分程度）では難しく、経験者との差が大きくなると考えられた。

そこで、初心者を集団にしグループレッスンを行う事によって、まだ自力で学習する方法が身につけていない初心者に対し、最も初歩的な理論と、楽譜の読み方の導入、ピアノの演奏方法の基礎を学び、その基礎に基づいた練習方法を身に付けることができるのではないだろうかと考え、授業3コマ分の時間を使用し行った。また保育者養成校に入学を希望する生徒たちにとって、ピアノの授業は不安を伴う^{表1及び表2}というアンケート結果を受け、共に学ぶ仲間そして良い意味でのライバルを作ることでもあるのではないかと考えた。

5. 養成校におけるグループレッソンのメリット、デメリット

ピアノ実技において、個人的な能力の開発や技術の習得は実質的に個人の練習によるものが非常に大きい。

特に、幼児保育現場で必要とされる音楽技術は、幼児の表現を促し導き出すための技術である。言い換えれば、幼児に音楽や歌唱を通じて表現に必要な要素を伝えていくことにある。現場での幼児の表現は、音楽そのものの表現ではなく、幼児自身の心の発露である。そこには、保育者の持つ技術、そして幼児と保育者の人間関係が大きく影響すると考えられる。

養成校において、幼稚園教諭及び保育士を目指す学生に対し行われる音楽教育には、大きな2つの面がある。まず第1に知識、技術面での個人としての習得、そして保育者としての自覚の育成である。

グループレッソンのメリットは、集団で同じ課題や作業を行う共行動効果によって、「やらなければいけない」「悔しい」「手を抜けない」という感情を持ち、それぞれに努力をする姿が見受けられたことである。授業中、受講形態は集団であっても、一人1台用意された電子ピアノの前に座り、テキストを見て実際に音を出すのは個人である。その中で、きょろきょろと周囲を見渡しながらか、隣席の学生に話しかけようとしても、その学生が真剣に取り組み、話しかけられる状況ではないこ

写真1



とに気付き、自分を振りかえって立場を自覚する学生の姿は、埼玉東萌短期大学の平成29年度ブレカレッジ及び音楽I初心者向けグループレッソンの実際に見受けられたことである。(写真1, 2)

デメリットは、集団で行われる授業は目的と一定の水準を設けるために、中には理解できずついてこれない学生が生じる事である。学生を平均化するために行われるグループレッソンではないが、やはりそこには技術と知識の底上げを目的にしていることは事実である。技術の習得において、学生自身に気持ちはあっても手が思うように動かず、戸惑っている間に集団授業は先に進んでいく。まじめな学生であればあるほど自信を無くし、迷い、その場での自身に対する存在意義にまで疑問を持ってしまうという悪循環がある。そこから、自身で対処方法を考え実践すれば良いと考えるが、現在の学生は、その困難に立ち向かう力を得るよりも回避することを選択する傾向がある。更にそこから学校へ来ることすら嫌悪するようになる可能性と危険性をも含んでいる。

授業の初回は、まだよく知らぬ者同士が隣り合う楽器に座り学ぶ。しかし、1回目終了時には希薄ながらも関係性が存在し、2回、3回と過ぎていくうちに、グループレッソン受講者が計画的形成集団としてあった関係から自発的形成集団と変化していく様が見受けられた。また、受講回数が増えればと僅かではあったが個人差が現れ、それに対応するために「グループでの練習形態を

写真2



(写真掲載に関して本人よりインフォームド・コンセントの了解を得ている)

持った個人指導」を取り入れた。結果として、1回目から「全員で一斉に行うグループレッスン」で行う予定であったが、2回目からのレッスン形態は「全員で一斉に行うグループレッスン」と「グループでの練習形態を持った個人指導」を融合させたものとなった。

初心者がピアノ技術習得を目指し挑戦するとき、幼くネガティブな発声が多くあった。それが、少しずつではあるが「できる」と感じられる経験が増えていくことで、学生の反応にポジティブな変化が現れた。ネガティブな言葉は発せられなくなり、その代り無言になり、言葉なく次に行うべき課題に挑戦していった。その変化から、アンケートにあった授業に対する不安が減少し、共に学ぶという仲間意識が芽生え、周囲と自分を比較する事で自分の姿が見えるようになったと考えられた。悪ふざけや大声で自分を主張する者も減少した。これは、集団の力によるところが大きいと考えられた。

6. まとめ

本学で行われている形態は、「全員で一斉に行うグループレッスン」と「グループによる練習形態を持った個人指導」を融合させたものである。時間配分などは、現時点で特に規定は設けず、学生の状況を見ながら担当教員が相談し決定している。僅か2年間の記録ではあるが、この融合した形態が学生に授業内容が効率良く浸透し、理解と共に実技修得の道が見え、共行動効果が現れたところから、グループレッスンによるメリット、デメリットを考えた上であっても、そのレッスン形態がピアノ初心者に与える影響は大きく、学生の音楽技術、学びの練習方法の理解、精神的な成長に大変有効であると結論付けた。

音楽教育は人間教育であると考え。養成校において、保育士を目指す学生が大人になってから初めてピアノ実技を学ぶことは、その技術を身に付ける事を目的としながら、その過程において、「学生自身を育てる」ことを多く含まなければな

らない。個人レッスンでも教員との相互関係から可能であるが、やはりグループレッスンによって学生同士で学ぶものが重要であると考え。保育者養成校の学生に必要と考えられる音楽表現技術と保育者としての自覚を育むことが、本学で行われている「全員で一斉に行うグループレッスン」と「グループによる練習形態を持った個人指導」を融合させたグループレッスンによって可能であると考えられた。

初心者の学生は、「音楽Ⅰ」初心者クラスで、グループレッスンを受け、その後個人レッスンへと移行する。その際に、その学生の理解力、レッスンに向かう姿勢、態度など情報の共有のために、講師間の連携と情報交換が必要になる。平成28、29年度について、情報共有は足りなかったのではないかと考えている。

筆者は初心者グループレッスンが、より豊かな音楽表現技術を持ち、少しでも意識の高い保育士を育成するために、有効であるということを理解し、これからも研鑽を積んでいく所存である。

倫理的配慮について

アンケートについては、記入時にインフォームド・コンセントを行っている。

掲載写真についても、本人よりインフォームド・コンセントの了解を得ている。

引用文献、参考資料

- 1) 野上俊之 保育者養成におけるピアノスキルの習得～タッチの実態～
比治山大学短期大学部紀要第49号 2014年
p.73-84 p.75
- 2) 梁島章子、山崎和子、鹿谷奈智子、坂井康子 共著 初等教員養成のピアノ指導についての研究 京都教育大学 Ser.A, No.75, 1989年
p.59 p.65 p.62 p.68
- 3) バイエル 子供のバイエル(下) 全音出版
- 4) 石井 恵子、大見 由香、鎌形由貴乃、竹内アンナ 幼稚園教諭・保育士養成課程幼児のた

めの音楽表現 教育芸術社

- 5) 全国大学音楽教育学会（著，編集） 明日へ
歌い継ぐ 日本の子どもの歌：唱歌童謡 140
年の歩み 2013年 音楽之友社
- 6) 大学音楽教育研究グループ 教職課程の為の
大学ピアノ教本バイエルとツエルニーによる
展開 1977年 教育芸術社
- 7) ジェームス・L・パーセル 美田節子訳 音
楽教育と人間形成 1991年 音楽之友社
- 8) ジェームス・W・バステイン 丸山太郎訳
1993年 東音企画 効果的なピアノ指導法
- 9) 鈴木由美子 保育士養成校における音楽表現
実技「弾き歌い」に関する一考察 ピアノ実
技から弾き歌いへ導く練習方法の提案 2017
年 音楽教育メディア研究第3巻
- 10) 海老沢敏 ロバート・ペース教授の音楽教育
モーツァルトも＜ペース・メソッドを学んだ＞
2000年 婦人之友社
- 11) 小泉文夫 おたまじゃくし無用論 1983年
青土社
- 12) 鈴木由美子 ピアノ初心者へのピアノ実技指
導に関する一考察 練習意欲維持のための試
み 2016年 千葉敬愛短期大学紀要 第39号

落合知美 (埼玉東萌短期大学教授)

鈴木由美子 (埼玉東萌短期大学非常勤講師)